

P E T   G U I D E   S E R I E S

ペット・ガイド・シリーズ

# ザ・チンチラ

テンジクネズミの仲間の生態と飼い方

リチャード C. ゴリス 著

*Richard C. Goris*



誠文堂新光社

# ペット・ガイド・シリーズ ザ・チンチラ

## CONTENTS



- 1 チンチラとは ..... 6  
チンチラの分類と名前の由来 ..... 7

スタンダード／ベージュ／ブラック・ベルベット／エボニー  
ホワイト／ブラウン／シナモン／バイオレット／シールボイント  
COLONY 野生のチンチラ ..... 25

### ①チンチラの乱獲 ..... 25

- チンチラの歴史 ..... 29  
先住民チンチャ族とチンチラ／インカ王族のシンボルに／スペイン女王とチンチラの受難  
絶滅の危機へ／救い主、チャップマン氏現る／赤道を越えてアメリカへ／チャップマン氏の勝利

### ②野生チンチラの法的保護 ..... 40

- COLONY 野生のチンチラ ..... 62  
③チンチエロの狩り方 ..... 43

- チンチラの「スリーサイズ」 ..... 43  
大きさ／被毛／ひげ／尻尾／手（前足）／足（後ろ足、後肢）／耳／鼻／目／性器／歯／色

### ④チンチラの飼育 ..... 65

- 飼う前に考えましょう ..... 65  
チンチラの長所／チンチラの短所 ..... 65

#### 単数が複数か

1ケージに1匹が原則／複数飼育のトラブル／複数飼育は注意が必要

#### ケージ

形と大きさ／材料／ケージの底／ケージの内部

#### 砂浴び

なぜ砂浴びが必要か／砂の種類／砂浴びのさせ方

#### 餌

主食／購入と保管／ペレット／主食の与え方／良いペレット、悪いペレット／生野菜／おやつ／食糞

#### 環境

部屋／温度／湿度／運動

- 5 チンチラの行動 ..... 111

#### 一般論

毛づくろい／マスター／ペースヨン／排尿／排便／鳴き声／チンチラ同士／チンチラと飼い主との付き合いの方／チンチラの捕まえ方／子どもとチンチラの付き合い方

#### ④野生チンチラの生態 ..... 121



# CHAPTER 1



チンチラとは

## はじめに

私たち夫婦のチンチラとの出会いのきっかけは一通のクリスマスカードでした。表は陽気な顔のチンチラが赤い木の実をもぎ取ろうとする可愛い絵でした。当時たくさんのモルモットを飼っていましたが、彼らは皆、歳をとって一生の終わりに近づきました。モルモットがいなくなったら寂しいなど、次はクリスマスカードのチンチラのように手を使う動物を飼おうと決心しました。

早速ペットの問屋筋で探してみましたが、チンチラはどこにも売っていませんでした。上野動物園で細々と飼っていたようでしたが、とても分けてもらえるような雰囲気ではありませんでした。無理かなと思い始めた頃、我が家に届いた英国の小動物雑誌 "Fur and Feather" の表紙にショーで一等賞を取ったチンチラとブリーダーの名前が載っていました。しめた！と思い、買ってくださいと手紙を出しました。が、待てど暮らせど、返事はありませんでした。英國に留学していた教え子に頼んでブリーダーに電話をかけてもらいました。するとなんともショッキングな返事でした。「動物虐待で悪名高い日本なんかへはチンチラを分けてやるものか」と言われたそうでした。

かれこれ2年経ちました。次々とモルモットが永眠して、家の中が寂しくなってきました。というところへある日、アメリカの爬虫類学者から朗報の電話がかかりました。知り合いの家でチンチラの子が生まれ、里親を探しているということでした。生後3ヶ月の子チンチラを4匹もらうことにして、輸入手続きにかかりました。ちょうどその年、日本の国会がワシントン条約を批准したばかりで、税関の方ではビリビリしていましたので、米連邦政府当局から、このチンチラは条約対象外の動物である証明書を発行してもらいました。が、運悪く、わがチンチラたちが成田空港に着いたのは税関の幹部が皆帰宅したあとの金曜日深夜でした。結局チンチラも私も邁開けまで成田の保税倉庫で寝泊まりする羽目になりました。

その後もいろいろありましたが、私にとってつらかった経験も若いチンチラたちにとっては何のトラウマにもならず、むしろ何かおもしろい遊びとさえ理解されたようでした。その証拠に、4匹のうちの一匹が未だに（2001年12月現在）21歳で元気に暮らしています。

我々の暮らしに多くの幸せをもたらしたこの4匹の可憐な妖精にこの本を捧げます。

2002年1月吉日  
R. C. ゴリス



学名に関してチンチラは次のとおりに分類されます。

#### 哺乳類綱 Mammalia

#### ゲッシ目 Rodentia

#### チンチラ科 Chinchillidae

#### チンチラ属 Chinchilla

#### オナガ種 lanigera

「オナガチンチラ」(lanigeraが正しいようですが、文献によつては lanigerとつるものもあります)

#### ターピー種 brevicaudata

#### 「ターピーチノチワ」

#### コスチナ種 costina

#### 「コスチナチンチラ」

チンチラはもとは南米の北部から南部まで、アンデス山脈西側全域に分布し、海拔3000~5000mに生息していましたが、現在はチリ山地の保護区内にオナガチンチラがわずか数千匹残っているだけです(30ページ参照)。

タンビチンチラは絶滅したと考えられていきましたが、2001年3月、チリ、ロス・ラゴス大学のヒメネス博士により、生息が確認されました。コスチナ

チンチラは、博物館などにわずかな標本が保存されているようですが、これだけでオナガチンチラと別種であるかどうかは確認できません。野生からの新しい標本もありませんし、ほかにもさまざまな種が記載されていますが、これは地方変異か、貴、学者同士の情報交換が難しかったことによる重複の命名かもしれません。いずれにせよ、

野生にはわずかに生息していませんので、確かめようがありません。現在、毛皮業界で飼われているチンチラは大半が1923年にチャブマン氏がアメリカに輸入した12個体の子孫です(35ページ参照)。その後、ほかのオナガチンチラや「くわづかのタンビ

野生にはわずかに生息していませんので、確かめようがありません。

現在、毛皮業界で飼われているチンチラは大半が1923年にチャブマン氏がアメリカに輸入した12個体の子孫です(35ページ参照)。その後、ほかのオナガチンチラや「くわづかのタンビ

## チンチラの分類と名前の由来



かつては南米、アンデス山脈の西側全域に分布していましたが、現在はチリの保護区内にわずかに残るのみとなっています

毛皮業界やペット業界などによると、  
一般名のchinchillaと学名のChinchillaは、  
ともにChinchcaという南米ペルー先住  
部族にちなむスペイン語の指小辞で、  
「小さなChinchca人」を意味します  
(“Encyclopedia Britannica”)。一方、言  
語学者による「この名称は先住民の  
言語からスペイン語に入ったchinch  
(チンチエ：虫けら) のからなる指小  
辞で「虫けら」) といふ意味だそう  
です(“Barnhart Dictionary of  
Etymology”)。前者はいかにもものと  
もらしく聞こえます

重されるようになつたころ、最高級の毛皮なのに、「虫けらっこ」の毛皮では商  
品価値を損ねるので、毛皮業者が先住  
民の名に由来していると宣伝したものに



サボテンとカルドネスの自生するチンチラの故郷

違ひありません。

学名のlanigeraは「ウールを着たもの」、brevicaudataは「尾の短い」という意味のラテン語です。しかし、IUCN(国際自然保護連合)の文献では、英名はそれぞれ long-tailed chinchilla と short-tailed chinchilla というのを正式名として使っています。そこで本書では区別する必要がある場合はそれぞれ「オナガチンチラ」、「タンビチンチラ」としますが、上記で述べたように、出まわっているのはすべてオナガチンチラと思われるので、單に「チンチラ」と呼ぶことにします。

Photo : ©2002 Jaime E. Jimenez



2001年になってヒメネス博士によって再発見されたタンビチンチラ



野生のオナガチンチラ。現在ペットとして出回っているのは、すべてこの種と考えられます

# ① チンチラの乱獲

Jaime E. Jimenez博士（チリ ロス・ラゴス大学、生態学研究所）  
訳・Richard C. Gorist博士

**チンチラ・フィーバーの時代**

現在は2種のチンチラが認められていますが、かつては「チンチラ」という名称はすべてのチンチラの総称でした。従って、古い文書や商業的報告書では「種」の区別はされていません。チンチラは古代から人間に利用されてきました。ペルーのインカ族 (Incas) やチリ北部のアタカマニヨス族 (Atacameños) は昔からチノチラの被毛の柔らかさを珍重し、布に織つて王侯貴族の衣類を作っていました。また、チンチラの肉も白身で、脂がなく、おいしいので、食べられていました。

そして、チンチラの毛皮は黄金と同じ珍重されました。スペイン人はアンデス山脈を植民地にしてからほどなく、チンチラ毛皮の柔らかさ、美しい配色、保温性などに気がつき、入植者たちは早くも1500年代にヨーロッパへチンチラの毛皮を送っています。



チンチラ狩りはスペイン人や先住民にとって、またない開けのチャンスとなりました。野生のオナガチンチラの幼体。

シャム猫の毛色に似ているところから  
この配色はシールポイントといいます



特徴は黒っぽい耳と....



*Seal Point*  
....黒っぽい尻尾です



現代に生き残った野生のオナガチンチラ。その毛皮は古くから人間に利用され、18世紀からの乱獲により、絶滅の危機に追いやられてしまいました

に力を入れるようになります。より効率のよい捕らえ方も発案され、高い値段のおかげでチンチエロたちは捕れる数が少なくとも生活できるようになりました。こうして、チンチラたちはサバイバルの戦いにうち負かされたのです。先ず山麓や入りやすい山地から消え、やがて人里から離れた場所から

28年からです。当初はヨーロッパの需要はそれほどではなかつたのですが、時とともに増え、アンデス山脈地方のスペイン人や先住民にとって、またとない儲けのチャンスとなりました。チンチラの毛皮コートがファッショニ界で大流行し、値段は急騰しました。需要を反映して現地ではより多く

に力を入れるようになります。より効率のよい捕らえ方も発案され、高い値段のおかげでチンチエロたちは捕れる数が少なくとも生活できるようになりました。こうして、チンチラたちはサバイバルの戦いにうち負かされたのです。先ず山麓や入りやすい山地から消え、やがて人里から離れた場所から



かさを増すためにチンチラの毛皮の末の内側に混ぜられたハイイロチンチラネズミ

の住民が「チンチエロ」「チンチラ捕り」になり、彼らは、あたかも北米のカウボーイのように、チンチラの住む高山の乾燥地帯を象徴する人種となりました。

当初、チンチラ捕りたちは、かなりの儲けがありました。高値が付いたし、チンチラも多かったので、あまり苦労せずに現金が手に入ったのです。毛皮を集めていた中間業者らは、実際は大して払っていなかつたのですが、牧童たちやチリ北部の鉱山労働者たちにとっては大変ありがたい収入源でした。その結果、鉱山労働者が足りなくなることさえあったのです。

需要の増大につれ、チンチラ狩りがますます盛んになり、チンチエロたちは山地をくまなく回つてチンチラ捕りに励むようになります。彼らは地元のプローカーに安い値で毛皮を売り、プローカーは毛皮をあちこちの町に運びました。町では毛皮が12枚一束にされ、北部の輸出港に輸送されました。

もいなくなりました。乱獲による供給源消滅の典型的な例でした。

### 野生チンチラの統計

古い記録やチリ国立統計局のデータを調べれば、チンチラの迫害の規模を知ることができます。ほとんどの毛皮はチリの港から輸出されたのですが、合法的な輸出でも、報告されたのは実際の枚数の3分の1にすぎなかつたようです。また、チンチラ狩りの段階で傷ついた毛皮も多かつたこともありました。輸出の統計だけでは実

を知ることはできません。ですから「」にあげる数字はかなり少ないものと思つていただきたいのです。

1810年頃まではチンチラの商業的利用は少ない

かさを増やすために、高原のハイイロチンチラネズミ *Abrocomamaindroni*、あるいは北部の砂漠地帯のベネットチチラネズミ *Abrocomabennettii*（これらの種類はチンチラよりも小さく、毛皮の質が劣っていました）の毛皮がよく束の内側にこつそり混ぜられることがありました。チンチラ毛皮の輸出先是主に米国、英国、フランスおよびドイツでした。

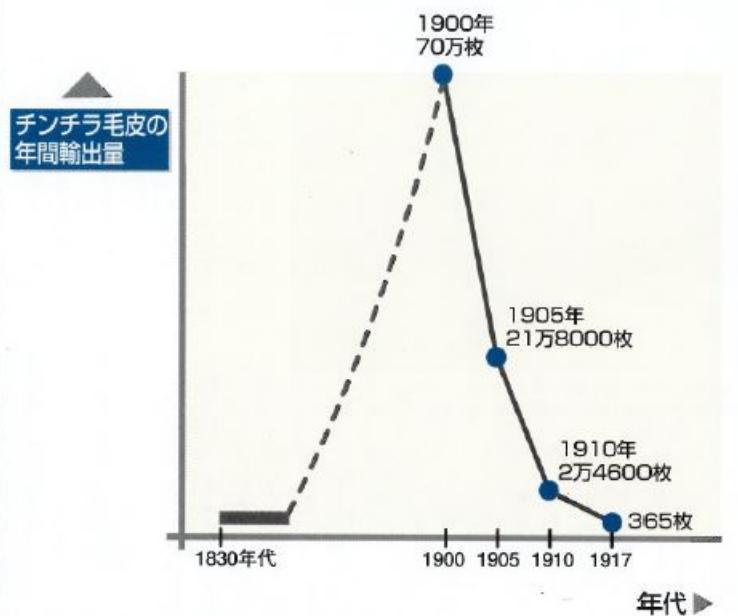
こうした広範囲にわたる絶え間ないチンチラ狩りの影響で、チンチラの繁殖力が捕られる数に追いつかなくなったり、その数はだんだんと減り始めました。やがて山麓から消えてしまったため、チンチエロたちはさらに高地を目指しましたが、チンチラ狩りはますます難しくなり、捕られる数も当然減つていったのです。

一方、毛皮量の減少は国際市場を刺激し、値段は急騰しました。この価格の上昇は、さらにチンチエロたちを刺激し、彼らはますますチンチラ狩り

ものでした。その後毛皮の輸出は1830年代の年平均2800枚から1900~1909年の平均25万4000枚まで増えてゆきました。ピークは1900年の70万枚で、1905年までに輸出は21万8000枚まで減り、1910年には2万4600枚だけになりました。1917年にはわずか365枚が報告され、事実上輸出は止まつたのですが、1840年から1916年まで合計700万枚の毛皮がチリから輸出されたことになります。さまざまな要素を計算に入れると、この数字は2100万匹の野生チンチラが殺されたことを示唆しています。

一方、報告のあつた84年間、インフレの影響も考慮すると、価格は56.8倍にも跳ね上がつたことになります（0.088ペソから50ペソまで）。1920年には、米国ミズーリー州セント・ルイス市でチンチラの毛皮一枚が170ドルもの高値で取り引きされていました。

# CHAPTER 2



19世紀から20世紀初頭までのこの時期に、チニチラは狂気じみた乱獲によりほぼ絶滅してしまいました

チニチラ毛皮の輸出港は当初のチリ北部から、次第に南部の港へ移りました。この事実を考えると、当時のチニチラはチリ北部、ボリビア、そしてアルゼンチンの北西部のものだったと推測されます。これはかつてタンビチニラが分布していた地域です。ここで少くともチニチライロたちはだんだん南へ移動し、おもにオナガチニチラを捕つていたと考えられます。

乱獲が最もひどかった1885年から1910年までのわずか25年間で、チニチラはほぼ絶滅してしまいました。昔の自然学者によると、20世紀前半にはすでにチニチラはもとの分布地域にはほとんど残っていない状態で、事実上絶滅していました。それでも1968年では、オナガチニチラはまだときおり捕っていたのですが、1978年までにはチニチラというものはチリでは完全に絶滅したと考えられました。タンビチニチラの最後の記録は1953年でペルーからでした。



インカ帝国では、チンチラの毛皮は王族貴族のシンボルとされました

インカ王族のシンボルに

100年も続いた「戦士の時代」に終止符を打つのはペルーから南下してきたインカ（Inca）族でした。1400年頃にインカ族はチンチャヤの全領土を占領し、インカ帝国に併合してしまいました。畑や作物など、いろいろ

な百きものを強要しましたが、チンチラの行政、宗教、文化などはそのまま存続させたようです。しかし、ひとつだけ大きな禁止令を出しました。チンチラ族にチンチラの毛皮製品の使用を禁止したのでした。そればかりでなく、その毛皮があまりにも上等なので、インカ王侯貴族のシンボルマークと決め、彼ら以外の庶民に使用禁止としま

七

インカ帝国の支配下でもナンチャ族は榮え、チンチラを食べ続けたものの、毛皮だけは支配者のインカ族に納め、王侯貴族は身分の証としてチンチラの毛皮マントなどを身にまとっていたようです。繁栄の絶頂のときにインカ帝国の人口が1000万人を超えたといわれていますが、どの部族も必要以上には動物を捕獲しなかつたので、うまく共存状態が保たれていました。チンチラもあまり人間を怖がらずに、手で捕まえられるほどおとなしく、楽しく山腹を遊び跳ねていました。

先住民チンチャ族とチンチラ  
チンチラが初めて人間の歴史に登場したのは西暦1300年前後です。その頃、現代のチリの北部に当たる海岸にチンチャ(Chincha)という先住民族が住んでいました。彼らは畑なども作っていましたが、おもに漁業で生計を立てていました。沖の海水は冷たく、魚が少ないので、おもに北のエクアドルの暖かい海域にいかだで行つて魚を捕っていたようです。そのおかげで部族は栄え、人口も当時としては多く、50万人にも達していました。しかし人間の欲は底を知りません。

ヤの人々は魚という大事な動物性タンパク源を失いました。代わりに高地に住む動物（アグーチ、バカ、ビスカチャ、チヌ、チヌラなど）を捕まえて、その肉を食べ、毛皮は衣服や寝具などに使うようになりました。とくにチヌラの柔らかくて丈夫な毛皮は珍重され、縫い合わせてじゅうたんの代わりや寝床の敷物に使っていました。

チンチラは人間が南北にやってくるほるか前から、アフリカ山脈の山腹で暮らしてきました。現在のアンデス高地里。

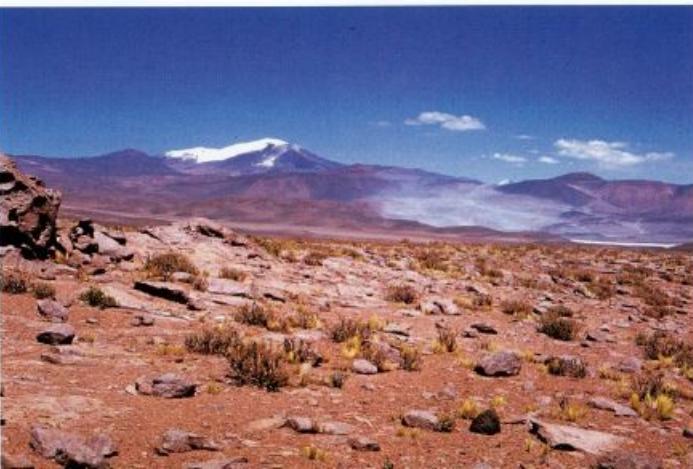


Photo : ©2002 Jaime E. Jimenez

チンチラはおそらく、人間が南米に到来するはるか前からアンデス山脈の山腹を楽しく遊びまわっていたに違ありません。しかし化石もあまりないので、その時代のチンチラについては何も知られていません。

が始まりました。彼らの口伝史によるところ、「戦士の時代」に突入したのです。数百年後、その口伝が次のように文書に書きとめられました。「彼らは戦い始めた、戦争と死者が後を絶たなかつたなつかつた。領主対領主……。流血と捕虜……。



「ハチワ」を放し飼いしていたため、しばしば野生動物に食べられたり、病気で死んでしまったのです。ちなみに、タンビチンチラに比べ毛皮の値段が安いものの、比較的飼いやすく、繁殖力が強いので、オナガチンチラの方が養殖の試みに多く使われました。

現在飼育されているチンチラのほとんどは、1923年、北部チリのボトルリーヨス (Potrerillos) 近辺で銅山の米国人技師チャップマン氏が捕獲し、

アメリカに持ち帰ったオス9匹、メス3匹の子孫です。この最初の12匹が何種だったのかはわかつていませんが、今では世界中にチンチラ養殖場があります。チリでは養殖されたオナガチンチラを野生に戻すプログラムが実施されましたが、失敗に終わりました。同様のプログラムが実施されましたが、失敗に終わりました。同様のプログラムが実施されました。アメリカのカリフォルニアと中央アジアのタジキスタンでも実施されましたが、やはり失敗していました。

チンチラは、元の分布域の大部分で早い段階で絶滅させられましたし、人々はタンビとオナガを区別していかつたので、元の分布範囲は正確にはわかつていません。ちまたの言い伝えや、また聞きの話によると、「アンデス種」(つまりタンビチンチラ)は海拔3000m以上のアンデス山脈に分布していました。タンビチンチラはペルー南部、ボリビア南西部、アルゼンチン北西部、およびチリ北部ラ・セレナ (La Serena) 市以北に分布していましたと言われています。しかし、筆者の経験に基づいて考えれば、ラ・セレナ市ほど南までは分布していなかったと思われます。

また、「沿岸種」(つまりオナガチンチラ)はチリだけに分布し、沿岸の陥しい山脈で、タンビチンチラよりも低い標高で生息していたようです。古い

## 2 野生チンチラの法的保護

Jaime E. Jimenez博士 (チリ ロス・ラゴス大学、生態学研究所)  
訳・Richard C. Goris博士

1890年代にはすでにチンチラの近い将来の絶滅が危惧され、一部の人たちが保護運動を起こしました。その結果、1898年にチンチラ狩りを制限する法律が施行されました。この法律やその後に作られた法令は、実際にまつたく適用されませんでした。1910年にはチンチラ毛皮の主な輸出国、すなわちチリ、ペルー、ボリビア、アルゼンチンはチンチラを保護する初めての国際条約を批准しました。この条約でチンチラを捕まえたり商業的に利用したりすることが禁止されたのですが、条約の結果はチンチラ毛皮の価格を急上昇させただけでした。条約前と比べ価格は14倍にも跳ね上がってしまったのです。

チリではその後、1929年に毛皮動物を保護する初めての法律が施行されました。大変厳しい法律ではあったのですが、これもほとんど適用されませんでした。チンチラの密猟が事实上終わったのは、今からほんの30年ほど前です。

20世紀の初めに、何人かの企業家が北部チリと北部アルゼンチンの農場でチンチラの養殖を試みましたが、その多くは失敗に終わりました。というのも、依頼された農家はチンチラの生態をあまりよく理解していなかつたのです。また、多くの農場では、石垣で囲まれた圃にチ

ビ前のことです。

現在では、チンチラの両種がCITES (Convention on International Trade in Endangered Species) における「エンドヘント(条約)の付属書」、すなわち最も厳しく商業取り引きが規制されている動物のリストに掲載されています。チリでは「Endangered」「絶滅に瀕しかかる」種、IUCN (International Union for Conservation of Nature and Natural Resources) 國際自然保護連合では「Threatened」「絶滅危惧」種と見なされています。

### チンチラ養殖の始まり

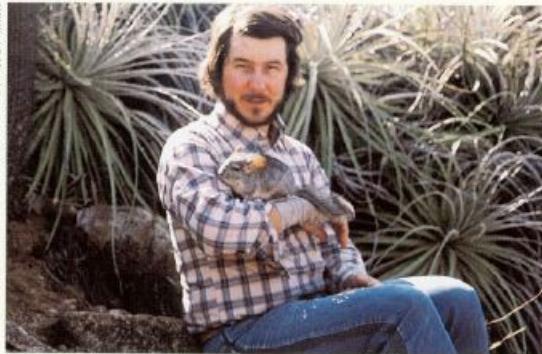
## CHAPTER 3



チンチラの「スリーサイズ」

文献によれば、この種は北部のタルタル (Tal Tal) 以南からタルカ (Talca) まで分布していたと思われます。しかし筆者の経験や他の証拠にもとづけば、イヤペル (Iapel) あたりのチヨアパ川 (Choapa River) より南には分布していないなかつたと想われます。

保護区の野生のオナガチンチラ(ムニス博士(一〇〇年代)



### オナガチンチラの再発見

1975年、アメリカ平和部隊のコンニ・モーリス (Connie Morris) 氏は元チンチエロのバルドメロ・ペニャ (Baldomero Peña) の助けを得て、オナガチンチラが野生でまだ生存していることを立証しました。チリの北部中央、イヤペルー町の北方17kmにあるアウコ (Aucó) 地方でチンチラの複数のコロニーが発見されたのです。北部チリのほとんどと同様に、この地方も国有入会地だったので、ヤギの飼いすきによって、非常に荒れていきました。

もとはトゲの多い低木と大きな石ころに覆われたこの土地は、ヤギや薪取りなどの影響で今や植物が完全になくなつていました。

チンチラの再発見を受けて、チリの林野局 (CONAF) はその土地を買収し、保護しようと動き出しました。多難な道のりではありましたが、大勢の農民との協力で、CONAFはチンチラの研究をうち切り、チンチラ以外の目的を持つ研究者が保護区を訪ねるようになります。

取り引きの末、CONAFは4229haの買収に成功し、1983年、「国立チンチラ保護区」を制定しました。管理棟が建てられ、野生化したヤギ、ロバ、牛などが入れないよつ、保護区全体の周囲にフェンスがめぐらされました。

この保護区の最初のレンジャーにはペニャ氏が任命され、彼は厳しく外部者の入場を禁止しました。続いてモーリス氏が、WWF (World Wide Fund for Nature 世界自然保護基金) とCONAFの援助を得てチンチラの野生生態の観察を始め、この調査は、後いろいろなチリ人の学者によって受け継がれました。私も3年半の間、チンチラを調査し、保護区隣接の地域にも他のチンチラのコロニーをいくつか発見しました。が、残念なことに、1990年代前半にチンチラへの興味が薄らぎ、予算も削られたため、CONAFはチンチラの研究をうち切り、チンチラ以外の目的を持つ研究者が保護区を訪ねるようになります。

Photo: ©2002 Jaime E. Jimenez



チンチラ狩りにはさまざまな罠も使われました。  
1980年代に使われていた簡単な手ズミ捕獲器

また、適当な岩場の割れ目がない場所では、チンチラは「カルドネス」(cardones, *Puya berteroiana*)という大きなブローメリア（アナナス、パイナップルの仲間）を利用していました。トゲにおおわれたこの植物は赤道直下の山腹にたくさん生えていて、チンチラにとって格好の砦になります。チンチラの手足は地面を掘るには適していませんが、歯が鋭いのでカルドネスの太い茎をかじって、茎の根元まで

ませ、引っ張り出す。この獵法はごく最近まで使われ、私も地元の人気がこれでチンチラを簡単に捕まえているのを自分の目で確かめたことがあります。

### カルドネスの砦を攻める

チンチラの巣穴を探り出し、逃げ惑うチンチラを捕まえるために、チンチエロたちは犬、なかもファオソクスニアを訓練して使いました。また、犬の他にヨーロッパから輸入したフェレット、または地元のフェレット *Galictis cuja* も訓練して使いました。

### 犬やフェレットでの狩り

チンチラの巣穴を探り出し、逃げ惑うチンチラを捕まえるために、チンチエロたちは犬、なかもファオソクスニアを訓練して使いました。また、犬の他にヨーロッパから輸入したフェレット、または地元のフェレット *Galictis cuja* も訓練して使いました。

同時にチンチラが利用できる岩場を破壊してしまうことにもなったので、その場所からチンチラがいなくなる結果を招きました。

### 手鏡と針金

さらに、手鏡の反射で穴の中を照らす方法も使われました。鏡で照らし、穴の壁に血の跡がついていたり、底に糞が落ちていたりしていれば、その穴が使われていると分かります。そこに、先端が螺旋状に曲げてある針金を穴に差し込むという方法です。感触でチンチラがいるのを確認すると、針金をぐるぐる回し、先をチンチラの被毛に絡

みます。これは、チンチラが逃げられそうな穴をすべて石などでふさぎ、メインの入り口からフェレットを入れると、それを殺して引っ張り出すか、追い出して待ちかまえているチンチエロが捕まえるというものでした。北部チリでは未だに石でふさがれたチンチラのかつての巣穴がたくさん見られます。また、火を焚いて煙でチンチラを巣穴から追いや出す方法も使われました。

## ③ チンチエロの狩り方

Jaime E. Jimenez博士（チリ ロス・ラゴス大学、生態学研究所）  
訳・Richard C. Goris博士

チンチエロ（チンチラ狩りの人々）はどうか？

トハネルを作つて住んでいました。そこで「」でチンチエロたちは道具でカルドネスを割つたり、火を放つたりして、中のチンチラを追い出し、犬などを使つて捕まえていました。チンチエロたちが頻繁に「」の方法を利用したので、地平線上に、一度に数多くの山火事の煙を見かけることが珍しくないほどでした。しかし、「」こうしてチンチエロたちはチンチラだけでなく、カルドネスなどの関連する動植物もすべて絶滅に追いやったのです。

### チンチラの狩りの本領

自分の手で地面を掘れないので、チンチラはしばしば他の動物の掘つた巣穴を利用しました。その場合、チンチエロたちは簡単にチンチラを掘り起し、「」すことができました。そして、こうした穴の中から思いがけない宝物が出土することもありました。文献によると、チンチラは地方によって、干ばつ

などに備えて食用の種を蓄える習性があつたというのです。とくにたくさん集めていたのはアルガルロビヤ (*algae robilla, Balsamocarpion brevirostrum*) という植物の種でした。

アルガルロビヤは「」つした岩の斜面に生え、種の入った鞘をつけるのですが、種はタンニンをたくさん含んでいます。が、「」の種は集めにくいため、かなりの高値で輸出されていたのです。つまり、チンチラの巣穴を掘り起こすと、チンチエロたちは二つの宝、すなわちチンチラとアルガルロビヤの種を一度に手に入れることができたというわけです。ちなみに今日では、チンチエロたちの乱獲によつて、このアルガルロビヤという植物もまた絶滅に瀕しています。

### 罠

チンチエロたちは罠も使いまし

た。最も簡単でボピュラーなのは「号の罠」と呼ばれた方法です。3本の細い棒を「4」の形に組み、これに重い石を立てかけるといふもので、チンチラの好きな餌を棒の一本に取りつけ、チンチラが餌を引っ張ると棒がはずれ、石でチンチラが圧死するという仕組みでした。しかし、「」の罠はチンチラの成体だけでなく、子チンチラや他の種類の動物も無差別に殺すものでした。

さらに、動物を生け捕りする金網のねずみ取りの罠も使われました。入り口に特殊なドアが仕組まれて、動物が押すと簡単に入れるのですが、一度入つたら出られないというものでした。未だに、放置された「」の種の罠が山のあちこちに見られます。また、まれに輪繩、虎ばさみ、毒団子、そして動物を罠へ導く布製の長いフェンスなども使わせていました。

## CHAPTER 4



# チンチラの飼育

# 4 野生チンチラの生態

Jaime E. Jimenez博士（チリ・ロス・ラゴス大学、生態学研究所）  
訳・Richard C. Goris博士

成体の体重は500gにもなることがあります。オス・メスとも、たいがい450gぐらいです。おおよそ13cmの尻尾を含め、体長は36cmくらいになります。現在の養殖チンチラに比べて野生のものはネズミに似ています。

何十年もの間、毛皮を取るためにチンチラ狩りが行なわれましたが、野生チンチラの生態や自然史については、ほとんど何も知られていませんでした。以下の記載は、筆者が1980年にWWF（世界自然保護基金）とCONAF（チリ林野局）の支援で、3年半の間に行なった調査にもとづくものです。目的は、野生チンチラの保護と管理のための生物学的データを得ることでした。

**大きさ**

子づくり

野生ではチンチラは年に2回繁殖します。ビーグルは、南半球の春（9～10月）と晩夏から初秋にかけて（2～3月）です。子供は体重60gになると巢穴から出るようになります。一腹の数は正確には知られていませんが、メスの6つの乳頭のうち、2つだけから乳が出るので、一腹2匹だけだと思われます。また、体が小さいわりに、チンチラはとても寿命が長い。私は6年前に耳に印を付けた個体を数匹再捕獲したこともありますし、他の捕獲個体も

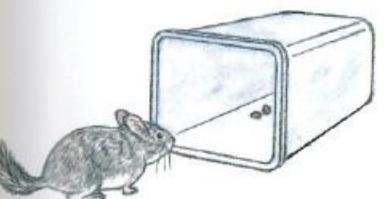
の手を使えば、チンチラの頭で、おやつと箱が結びつきますから、捕まえやすくなります。

もちろん、意図的にチンチラを外に出したときだけでなく、うつかりしてケージから逃げ出されたときも、これらの方を使ることができます。

## 子どもとチンチラの付き合いで

チンチラは子どものペットとしてはお薦めできません。ウサギやモルモットのように抱かれたり愛撫されたりす

### 部屋に放したチンチラの捕まえ方



● 空のゴミ箱などを横に倒して中におやつを置きます



● チンチラが入ったラッシュを立てて



● チンチラがジャンプして飛び出す前に、すかさず両手で抱き上げます

るのをいやがります。子どもが怒つて無理に抱こうとすると、チンチラは被りは負傷することもあります。噛みつくこともあります。子どものいる家庭で飼ってもかまいませんが、世話は親の責任で行なうべきです。餌をケージに入れたり、飲み水を取り替えたりするなどの世話を子どもに手伝わせてもよいのですが、あくまでも親の監督の下でやるべきです。

チンチラは、しばしば噛みつこうとします。でも、驚いてはいけません。がさせたりしますから、強く噛む力はもっています。ですから、チンチラと子どもの付き合いには充分注意しましょう。子どもにルールを教えて責任は、相手の指を噛み切ったり、耳に大きな傷をついたりしますから、強く噛む力はもっています。ですから、チンチラと子どもの付き合いには充分注意しましょう。子どもにルールを教えて責任をもつて守らせる必要があります。

めったに痛い噛み方はしません。ほどの場合、好奇心による甘噛みです。たとえば、飼い主が指を差し出すと、チンチラは指先や爪を軽く噛んで調べます。髪の毛、男性の腕の毛、服のボタンなどもよく噛んで調べます。しかしチンチラ同士でけんかとなるときは、相手の指を噛み切ったり、耳に大きな傷をついたりしますから、強く噛む力はもっています。ですから、チンチラと子どもの付き合いには充分注意しましょう。子どもにルールを教えて責任をもつて守らせる必要があります。

のよい腎臓は、寒くて乾燥した環境への適応です。やや大きめの耳（5cmぐらい）はすぐれた集音器として働き、非常に発達した中耳と内耳に音を導いて、捕食者が忍び寄る足音までも感知することができます。

なっています。この暖かい被毛と能率性の体温調節機能は、野生のチンチラにとって重要な生存戦略です。しかし、彼らの体温調節機能は、人工的な環境では適応できません。彼らは、体温調節機能が弱いため、熱中症や寒さによる死を経験する可能性があります。

## 体と行動

チンチラは完全に夜行性で、非常に機敏に走り回ります。尻尾でバランスを取りながら、後ろ足ですばしこく岩から岩へと跳躍します。後ろ足が跳躍に適して長くなっています。指は3本だけが発達しています。ゆっくり歩くときには前足も使いますが、前足はおもに食べ物をつかむために使われます。爪は平らで、地面を掘るには適していません。また、後ろ足の内側の指には「くし」のような堅い毛が一揃いがあり、毛繕いに使われます。

夜行性動物にふさわしく目は大きく、瞳孔は猫などのように縦の楕円形になっています。長いひげを持ち、狭い環境の中での移動や暗い巣穴に入るときに役立つと思われます。夜の活動を観察すると、すばらしい追いかけっこがよく見られますし、人間の耳にもよくわかる、いろいろな鳴き声が聞こえます。

## 社会

チンチラは数匹から4000～500匹までのコロニーを作り生活しています。観察データはまだ不充分ですが、どうやら家族単位で共同のトンネル網を利用しているようです。同じ斜面に棲んでいる複数の家族が一つのコロニーを作り、コロニーの境界線を糞でマークしています。糞は黒っぽくて細長く、大きさは個体の大きさを反映します。糞を点々とバラバラに落とすこともあります。また、生け捕りや糞を数えるなどして推測しますと、1haあたり2～8匹だと考えられます。

また、同じ場所に棲んでいる他の小動物に比べてチンチラの生息密度は低く、生け捕りや糞を数えるなどして推測しますと、1haあたり2～8匹だと考えられます。



ナンペイアカギンズの糞の中に見られたチンチラの白糞



野生チンチラの天敵となるナンペイアカギンズ

## チンチラの捕食者

チンチラの生息地には12種の捕食者が分布していますが、チンチラを食べるものとしては、そのうちの4種が知られています。「ワシノツバメ」(Bubo magellanicus)、メノフクロウ (Tyto alba)、およびコビトフクロウ (Glaucidium nana) はチンチラの子どもを食べ、ナンペイアカギンズ (*Pseudalopex culpaeus*) は子どもも成体も食べます。食べられた動物の種類や大きさはこれらの捕食者の糞に残る骨や歯で推測できます。

これら4種の他にチンチラに危険と思われる動物は、ヤマネコ (*Oncifelis colocolo*)、ヒョウマ (*Puma concolor*)、そしてその地方固有のフェレット (*Galectis cuja*) です。しかし、「これら3種については確かな報告はありません。ただ、チンチエロたちがチンチラを捕まえるようにフェレットを訓練

えます。小高い岩を見張り場に使うらしく、そうした小高い場所は尿や糞ではつきりマークイングされています。また、被毛を整えるために、崩れた岩からできた砂でよく砂浴びをします。

## 食べ物

野生チンチラは、イネ科やその他の草、低木、種、サボテンの実、樹皮などを食べます。最も好むのは草とサボテンの実です。餌を自由に選べさせる実験では、生のものより、枯れた草の類を選びました。いろいろな理由があるでしょうが、山の草の一部は草食動物から身を護るために毒の成分を含んでいるものの、枯れるとその成分が揮発してしまう」とが、おもな理由だと考えられます。また、生のものと違って枯れ草は夜露を吸収して濡れるので、これを食べる」とで、チンチラは必要な水分を摂取しているとも考えられます。



調査のために発信器をつけられた野生のオナガチンチラ

# CHAPTER 6



## チンチラの繁殖

していた事実がありますので、自然でもチンチラを食べている可能性はあります。

### 寄生虫

私の知っている限り、野生のチンチラについて一種だけの寄生虫が報告されています。それは人間の「チャガス病」の原因になるトリパノソーマ鞭毛虫（ぐんむわいのりゅう）の一種です（トリパノソーマの仲間は人間の「眠り病」の原因にもなります）。媒介は、「ワインチュカ」という動物や人間の血を吸う昆虫です。血を吸いながら糞を相手の皮膚に落とし、相手がかゆみのために刺されたあとをひっかくと、糞にいる寄生虫がひっかき傷から血液に入ります。人間では心臓肥大、腎臓の腫瘍、流産などの原因となります。調査したチンチラの40%がこの寄生虫を血中に持っていましたが、発病は観察されていません。

### 生存競争相手

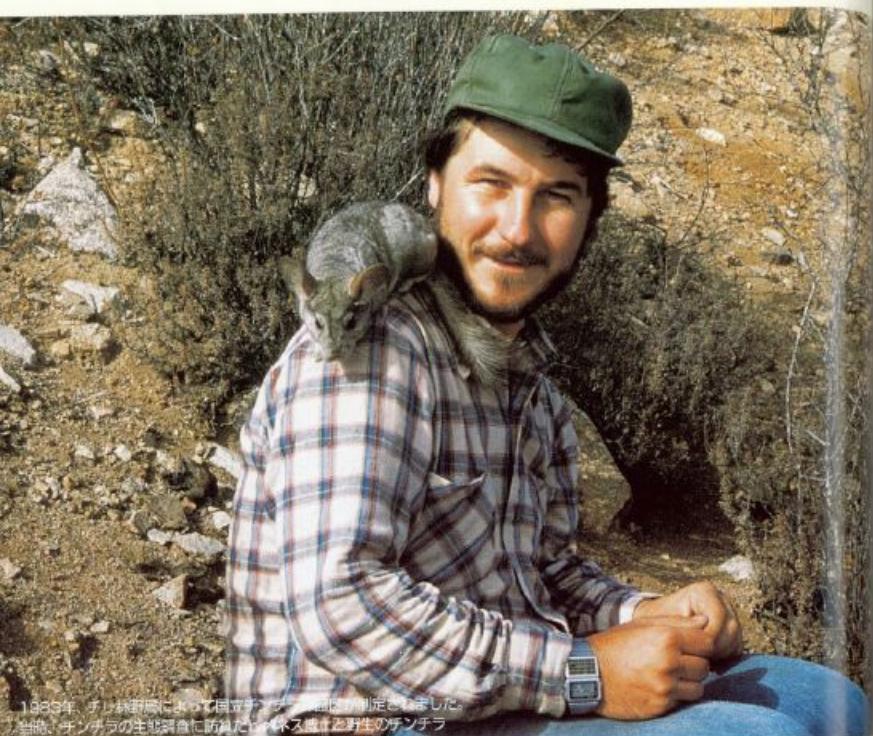
チンチラと同じ穴を利用します。また、数百年前に人間が連れてきた家畜のヤギも餌に関しては恐ろしい競争相手です。

環境の限られた資源、すなわち、ヒョルタ一と餌に関してチンチラと生存競争する動物は何種かいます。たとえば、チンチラと同じ穴やトンネルを利用する小型哺乳類がいます。有袋類のヒメオボッサム（mouse opossum, *Thylamyces elegans*）や齧歯類の「テグー（degui, Octodon degus）」、ベネットチハサクネズミ（Bennett's chinchilla rat, *Abricomys bennetti*）、「リーフ・イヤード・マウス（leaf-eared mouse, *Phyllotis darwini*）」、オリーブ・マウス（olive mouse, *Abrothrix olivaceus*）、ウーリー・マウス（woolly mouse, *Abrothrix longicaudatus*）などもおとくなネズミ（jumping rice rat, *Oligoryzomys longicaudatus*）がいます。これらの齧歯類は餌に関する競争をしておらず、お互いに競争しないまま、お互いに「テグー」や「カゲ」の一種 (*Callopistres palluma*) もチ



野生のチンチラと生存競争する動物の一種に齧歯類のテグーがいます

Photo : ©2002 Jaime E. Jimenez



1989年、チリ共和国によって国立チリ・ラゴス大学が開設されました。当時、チンチラの生息調査に貢献したペレス博士と野生のチンチラ

コロニー

チンチラはたいがい岩石が突き出でて、カルドネスの多い北の急斜面（15～39度）をすみかに選びます。水のあるところから必ず遠く離れていて、コロニーとコロニーの間も広く開いています。つまり、チンチラの個体群は「渡り廊下」でつながった複数のコロニーで成り立っているのです。さらに、「渡り廊下」を通って行き来はするものの、生まれたコロニーから遠く離れることは滅多にないといふことが、テレメトリーの調査でわかつています。放牧のヤギが個体群の中に入り込むと、この渡り廊下を破壊して個体群全体に計り知れないダメージを与えます。

チンチラが生息しているのは険しい山地です。1900m級の山々の間に深い谷間がたくさんあり、標高400mあたりまで下らないと平原などはありません。植物層はおもにトゲが多い低木で、多肉植物も若干あります。山の北斜面は乾燥していて、砂地と岩場が多いのですが、南斜面は砂地や岩場がそれほどありません。北斜面にはサボテンや「カルドネス」（cardones, *Puya berteroniana*）という大きなブロメリアがたくさんあり、その間に少量の草が生えています。一方、南斜面には草が多く、サボテンとカルドネスはあまり生えていません。

果、降雨量の少ない時期になつて、ネズミ類が減ると、より多くのチンチラが捕食者の餌食になります。

## ⑤ 野生チンチラをとりまく環境

Jaime E. Jimenez博士（チリ ロス・ラゴス大学、生態学研究所）  
訳・Richard C. Goris博士

オナガチンチラの現在の分布は、チリ国立チンチラ保護区とその周辺、およびその北方250kmにある46haのコロニーに限られています。この地域は暖かくて乾燥しており、雨は少なく、降るのは冬だけです。4年ないし12年おきに太平洋でエル・ニーニョ現象が起るのですが、このときは降雨量が増え、植物が生い茂り、それに伴つてネズミの大発生も起ります。そして当然ながら、ネズミたちを餌にしている捕食者も増えてきます。一方エル・ニーニョ現象が終息すると、降雨量がまた少くなり、草花は枯れ、ネズミ類の数も激減します。

しかしチンチラはエル・ニーニョの影響をあまり受けず、数の増減は見られません。それはチンチラの繁殖速度が緩やかで、枯れた草でも充分な栄養を摂れるからだと思われます。その結

リ国立チンチラ保護区とその周辺、お

### 生息環境

太平洋の水温が  
チンチラに及ぼす影響

チリ、降雨量の少ない時期になつて、ネズミ類が減ると、より多くのチンチラが捕食者の餌食になります。



## チンチラの数

筆者が、徒歩または乗馬でチリ国立チンチラ保護区を中心に $13 \times 20\text{ km}$ の地域をくまなく調査したところ、飼育から判断して保護区内には19の「コロニー」、周辺に23の「コロニーがある」とがわかりました。保護区の外のコロニーは、一部が人家のかなり近くにあり、残りは家畜の放牧地区にあります。地元の人間はチンチラの存在にほとんど気がついていないようです。

「コロニーの広さは様々で、1.5ないし113.5 haです。コロニーの60%にはチンチラが50匹未満で、多いコロニーでも500匹未満です。繁殖力が弱いので、匹数の少ないコロニーは常時減びる危険にさらされています。1990年の時点で、全コロニーの面積 $\times 1\text{ 平方mあたりの推定匹数を計算してみると、保護区内には1122ないし5500匹、保護区外には$

1318ないし6205匹が生息していると推定されました。

### チンチラ保護にとつての障害

チンチラの数はどんどん減っている傾向にあるようです。1982年から1989年の間、コロニーの総面積は半分に減りました。また、発見当時12の大きめのコロニーであったものが、現在28の小さめのコロニーに分かれています。これはチンチラの数が減少傾向にあることを示しています。いろいろな理由があるでしょうが、保護区内の捕食者、とくにキツネが増えたというのがその一つでしょう。周囲に人家が増え、生ゴミなどを食べてキツネは数を増す。しかし、人間がキツネを追い払うので、キツネは保護区のフェンスをぐって人間の迫害を逃れ、そしてチンチラを食べるという説です。もう一つには、チンチラが回復不可能な少

数になってしまったという説もあります。しかし、人間がキツネを追い払うことで、キツネは保護区のフェンスをぐって人間の迫害を逃れ、そして周囲に人家が増えて、生ゴミなどを食べてキツネは数を増す。しかし、人間がキツネを追い

保護区外では、金や銅の発掘活動やヤギの放牧がコロニー間の通路を破壊し、コロニー同士の交流を不可能にします。また、この地区のはとんどの人家では犬や猫を放し飼いにしていますので、これらのベットが保護区内外のチンチラに与えている害は計り知れません。

もう一つの大きな問題は、保護区の形と交通機関です。交通量の多い舗装道路と鉄道が保護区を真っ二つに分断しています。ですから、一分された双方の区域のチンチラの交流が不可能になっています。なお、分断された

第三には、政府当局による長期の観察・研究プログラムが必要です。これで得られる日常的なデーターこそ、チンチラの生存を保証する土台になるでしょう。

その他にも、保護地区を通る道路や鉄道を撤去することが望まれるのですが、現状では難しいでしょう。キツネを駆逐する案も出されていますが、キツネがいなくなると、キツネに抑えられているチンチラの他の天敵が増える可能性がありますから、あまり現実的な案とは言えません。



イヤコ国立公園はチリ北部アンデス山脈の山腹の標高3100mに、面積は27万haです



タンビチンチラの生息地は極端に険しく、気候も厳しい環境です

んで、2001年3月にそこにあった断崖の縁をいくつか仕掛けでみたところ、ついに成功！ 3晩で11匹のタンビチンチラを捕まえました。

タンビチンチラと確認してから、5匹はその場で解放しましたが、生理学者の仲間一人は研究したいと言つて、南方1000kmにあるラ・セレナ市(La Serena)に残りの6匹をつれて帰りました。

ました。研究が済んだら解放するという約束でしたが、嘆かわしいことに1匹はまもなく(ストレスで?)死に、あと5匹も未だに野生に戻されていません。あらゆる手段で保護すべきこの動物について、このようないかがわしい「研究」を許可した政府當局は厳しく非難されるべきだと筆者は考えていました。

### タンビチンチラの現状

その後も筆者は調査を続け、70km×70kmの地域におよそ16コロニーを発見しました。コロニーのほとんどはユヤイヤコ国立公園の中にあります。観にかかった匹数とオナガチンチラでの経験から類推して、1コロニーは1~5haの広さで、1コロニー内に棲んでいるのは2~4ないし20~30匹と思われます。

また、ユヤイヤコより北方200km、アルゼンチンとボリビアの国境近くにも「チンチラ熱」の時代にタンビチンチラがたくさん捕獲された環境がありましたが、このときの調査では1匹も見つけることができませんでした。

### タンビチンチラの生息環境

## ⑥ タンビチンチラの再発見

Jaime E. Jimenez博士 (チリ ロス・ラゴス大学、生態学研究所)  
訳・Richard C. Goris博士

タンビチンチラは1943年で絶滅したと見なされています。最後に正式記録されたのは、ペルーでは1955年、ボリビアでは1939年、チリでは1950年代のことでした。アルゼンチンからは全く情報があります。このときは、この毛や歯がませんでした。CONAF(チリ林野局)とWWF(世界自然保護基金)は、1980年代に数回にわたってチリ南部と北部を調査しましたが、タンビチン



タンビチンチラは、オナガチンチラと比べ、体全体はやや大きく、尻尾、耳、四肢は短く、丸みのある形をしています

その後まもなく、チンチラの溜糞で標識されたなわばりの中で、キツネの糞を見つけました。糞の中にチンチラらしい歯とふわふわした毛が含まれていました。「このときは、この毛や歯がチンチラではなく、マウンテン・ビスマスチャのものである可能性がある」と考えたのですが、数日後、同じ場所でチニチラらしい古い頭蓋骨と、しばしばチンチラと同居するハイイロチンチラネズミの頭蓋骨を見つけました。チニチラがいるに違いないと意気込

チラは1匹も見つかりませんでした。2000年に、筆者はチリ北部に新しく作られたユヤイヤコ(Llullaillaco)国立公園を調査中、チンチラらしい溜糞を発見しました。ユヤイヤコ国立公園は、チリ北部アンデス山脈にそびえる6000m級のユヤイヤコ火山の山腹、標高3100mにあり、面積は27万haです。砂漠のようない荒れ地は、地球上最も降雨量の少ない地域のひとつです。

その後まもなく、チンチラの溜糞で標識されたなわばりの中で、キツネの糞を見つけました。糞の中にチンチラらしい歯とふわふわした毛が含まれていました。「このときは、この毛や歯がチンチラではなく、マウンテン・ビスマスチャのものである可能性がある」と考えたのですが、数日後、同じ場所でチニチラらしい古い頭蓋骨と、しばしばチンチラと同居するハイイロチンチラネズミの頭蓋骨を見つけました。チニチラがいるに違いないと意気込

候も厳しい環境です。現在生存している地方はチリのアンデス高原の一部で、険しい火山や岩石からなる山脈の中に広い高原があり、高原の方々に深い峡谷があります。いくつかの峡谷には溪流が流れていますが、低温のため、ほとんど一年中凍っています。さらに、強い風がほとんど一年中吹いています。湿度はおおむね低く、気温は日差の強い真夏でも滅多に氷点より上がりません。10年に1~2回、雷鳴が響き、少量の雪が降ります。もう少し標高が下がったところにはプンタ・ネグラ塩原という30 km × 10 km の塩に覆われた高原があります。

### タンビチンチラの自然史

タンビチンチラの配色はオナガチンチラのとほぼ同じですが、成体はオナガより体がやや大きく、体重も重い。8 cm の尻尾を含め、体長は 36 cm くらいです。メスはオスより大きく、650

g くらいになります。タンビチンチラは名前の通り、尻尾と耳と四肢がオナガチンチラのものより短く、被毛は深く、形は丸っこい。短い四肢や深い被毛は体温の流出を防ぐだけでなく、体温の蒸発も防ぎ、極端に乾燥した環境への適応と思われます。また、糞のペレットはオナガチンチラのものと同じく、堅くて黒く、長径は 10 mm くらい、厚みが 3 mm くらいです。實にかかった個体を放すと、素早く走ったり跳ねたりして、人間の手が入らないような岩の隙間に逃げ込みます。全体の行動から類推してタンビチンチラはオナガと同様、完全に夜行性であると考えられます。

また、タンビチンチラは、オナガチンチラと同じく、境界のはつきりしたコロニーで生活をし、1 コロニーは 2 ないし 30 の個体からなります。コロニーは、必ず大きな石がころころしている、あるいは岩盤に割れ目の多い斜面に作られています。巣穴として石と石の間隔は地面の 5 ~ 10 %、またはそれ以下です。非常に堅くて、低いイネ科の草や、トゲと毒素を持った低木がほとんどで、若干の小さくて丸いサボテンもあります。また、これらのはほとんどは、地上の部分よりも地下の根の部分が多い植物です。

この厳しい環境にも、他にわずかの脊椎動物がいます。チノチラと同じ岩場を利用するものとしては、ハイイロチノチラ (*Neotoma macrotis*) やキタハリネズミ (*Phyllotis xanthophrys*) がいます。さらに、近くの急斜面にはマウントノビスクチャヤ (*Lagidium peruanum*) が昼間活動しています。もっと平らなどこにはピクニーヤ (*Vicugna vicugna*) がイネ科の草を餌としています。また、2~3種のトカゲもいます。鳥では、オオレア (*Pterocnemia pennata*) とチナムー (*Tinamotis pentlandii*) がビクニーヤと一緒に生息していて、下の塩原には 3 種のワラシゴが繁殖しています。

タンビチンチラを捕食する動物はありません。筆者はコロニーの中、または近くでキツネの糞を 31 個見つけましたが、その中から見つけた被捕食動物の 7 ~ 2 % がチノチラで、その骨や歯の大きさから判断して、ほとんどは子どものチノチラのものでした。砂漠地帯にしてはキツネが多いと思われ



感したと見なされていたタンビチンチラが、2001年3月、ヒメネス博士の調査によって発見されました。ユアイヤコ国立公園でタンビチンチラを抱くヒメネス博士

う学者もいます。しかし「これはあくまでも仮説にすぎません。また、地元のフェレットやピューマもチノチラをかつて食べていた可能性はありますが、確かな報告はありません」。

の間の狭い隙間、あるいは岩盤の狭い割れ目を利用してます。狭い巣穴の利点として、捕食者から身を守ることだけではなく、気温の急変や極度の乾燥からも守れるという点もあるでしょう。

これまで発見したタンビチンチラのコロニーは例外なく標高 3,000 m 以上で、全く水のない斜面であることから立地条件はおそらく適当な隠れ穴の多いことでしょう。水はおそらくほとんどの餌から得るものと思われます。タンビチンチラ生息地のもう一つの特徴は植物層の貧弱さです。植物がおおう面積は地面の 5 ~ 10 %、またはそれ以下です。非常に堅くて、低いイネ科の草や、トゲと毒素を持った低木がほとんどで、若干の小さくて丸いサボテンもあります。また、これらのはほとんどは、地上の部分よりも地下の根の部分が多い植物です。

# チンチラを もっと知りたい！

Q & A

**Q1** 毛色によって性格が違つたり性格は違いますか？

**A** 毛色によって性格が違つたりすることはあります。しかし、改良色のチンチラはスタンダード色より寿命が短いようです。また、ある色同士で交配させると、妊娠はするが、胚は非常に早い段階で死んでしまうことが報告されています。

**Q2** 養殖チンチラは、野生には戻れないのですか？



**Q3** 人間の言葉はどうのくらい覚えますか？

**A** 飼育のチンチラを野生に戻すことは限りなく不可能に近いことです。野生で生まれた子チンチラは生活していくのに必要な知識を見学します。どんな所に隠れればいいか、何を食べればいいか、親戚とよそ者の違い、どんな敵がいるか、砂

浴びの場所と仕方など、すべて親から学びます。養殖チンチラを野生に放したら、極力人間の元に戻ろうとするばかりで、独立生活はできないでしょう。また、仮にてきたとしても、野生に戻せる場所は世界中のどこにもありません。

**Q4** チンチラに「おいだ」「ダメ」などのしつけは可能ですか？



+ビーチンチラ



リチャード・C. ゴリス (Richard C. Goris)

1931年アメリカ、ニューヨーク州に生まれる。豊かな自然に恵まれたナイアガラ河畔で多くの動物に囲まれて少年時代を過ごす。

1950年に来日。東京医科歯科大学、九州大学理学部を経て、現在は横浜市立大学医学部で客員教授をつとめる。理学博士。専門は生理学。

爬虫類の権威として知られ、長年日本爬虫両生類学会役員、会長を務め、現在は同学会名誉会員。比較眼科学会名誉会員、日本愛玩動物協会理事、ジャパンケネルクラブ公認訓練士。

チンチラ、リス、モルモット、ウサギ、チスイコウモリその他の小動物に関する飼育法を開発し、飼育施設を作りするなど多くの工夫を重ね、現在もチンチラ、秋田犬、ヘビ、トカゲなど多くの動物を飼育。

「日本の爬虫類」、「現代エチケット・マナー百科事典」、「アメリカ英語辞典」、「現代スラング英和辞典」、中学校・高等学校用文部省検定教科書（英語）など、数々の原著・訳本を発表している。

コラム執筆

ハイメ E. ヒメネス博士 (Jaime E. Jimenez)

チリ ロス・ラゴス大学生態学研究所。

1980年代にWWF（世界自然保護基金）とCONAF（チリ林野局）の支援で3年半にわたり野生チンチラの保護と管理のための生物学的データを集める。2001年3月に絶滅したと見なされていたタンビチンチラをユヤイヤコ国立公園で発見する。

撮影：井川俊彦

撮影協力：お魚かぞく、関根千津、水野由香

商品協力：(株) 三晃商会

繪：若林 稔

写真協力：市川香里、川崎昭博、倉田典子、長谷川和江、廣田 聰、湯浅博子

ブックデザイン：(株) ムックハウスJr.

イラスト：山本しげお

